



インクルーシブなボランティア活動を 生み出すコーディネーションのポイント

- ひとりの人として向き合う
 - ありのままを尊重し、配慮はしても特別扱いしない
- ひとりひとりの話に耳を傾ける
 - その人を知ること、よりよい参加の仕方が見えてくる
- その人らしさを活かした関わり方を一緒に考える
 - 「自分発」だと主体性が生まれやすい
- 選択肢をたくさん生み出す
 - 「できそう」「やってみたい」を自分に合ったやり方で試せる
- 「苦手なこと」も気軽に言い合えるチームをつくる
 - 自己開示ができる場はとて心地よい
- コーディネーターが孤立せず、つながる
 - 職場内や地域で一緒に考える仲間を増やす



あらゆる人の参加を実現するに

「インクルーシブ」ボランティアの コーディネーション



2022年度 企画メンバー

岩本 裕子	関西国際大学
椎名 保友	NPO 法人日常生活支援ネットワーク
谷水 美香	アサーティブコミュニケーション・トレーナー／精神保健福祉士
田村 幸恵	社会福祉法人ストローム福祉会 山王こどもセンター
広野 ゆい	NPO 法人 DDAC (発達障害をもつ大人の会)
松居 勇	大阪公立大学 ボランティア・市民活動センター
南 多恵子	京都光華女子大学
横山 泰三	NPO 法人わかもの国際支援協会
青山 織衣／永井 美佳／中島 理江／松村 幸裕子	大阪ボランティア協会 事務局

発行・連絡先：社会福祉法人 大阪ボランティア協会
〒540-0012 大阪府中央区谷町二丁目 2-20
2階 市民活動スクエア CANVAS 谷町
TEL 06-6809-4901 FAX 06-8609-4902
Email office@osakavol.org
https://osakavol.org/



デザイン ちまちま工房

「インクルーシブボランティア」は、年齢や国籍、障害や病気の有無等にかかわらず、「何かしたい」という思いを持った人が、合理的配慮のもと、だれでもその人にあったやり方で社会参加ができる「インクルーシブなボランティア活動」です。

今回は、人との関係づくりやコミュニケーションに難しさがある人、生きづらさを感じる人も、その人らしさや特技を活かしながらボランティア活動できるようなコーディネーションについて、現場の声を集め、企画メンバーが「これは大事やなあ」と話し合ったことをまとめました。



現場の コーディネーターの声

ボランティアしたい人の相談を受け止めて、活動につなぐ人や、ボランティアを受け入れる団体や施設のスタッフに聞きました。



障害や病気の名前でその人のことをラベリングして見るのはダメだなと気づいた。

一方でどんな困りごとがあるのか、下手な対応をしないためにも、障害や病気の特性については知識を持っておきたい。



現場から見る インクルーシブなポイント

いろんな人が関わったり、ボランティアしたりしている現場のみなさんからお話を伺いました。

現場での話を共有し、相談できるような場所やネットワークがほしい。



1回の面談だけでボランティアしたいその人のことを理解できるわけではない！



一方で面談ばかり繰り返しているわけにもいかず、何か一緒に作業ができるプログラムも必要で…それってどう作っていけばいいの？



「何かしたい」という人の思い

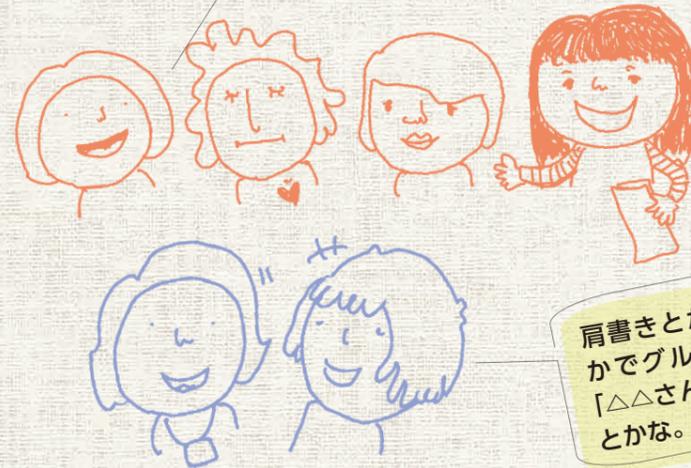
実際に活動している人に、参加しやすい環境について語ってもらいました。

発達障害のある人同士で語り合える自助グループを立ち上げたいと思っています。人によっては場所を確保するのに書類をたくさん書いたり日程調整したりするのが苦手な人もいますので、サポートがあるととても助かります。広報でも悩むことがあるので、広報先や内容を一緒に考えてもらえたら嬉しいです。

自分の苦手なところを隠さなくていい、苦手なことは「これはできない」と言える空気があるといいな。



「ここまでやらないといけない」「これをしないといけない」というルールがガチガチだとプレッシャーでしんどくなる…。



肩書きとか診断名とか年齢とかでグループに分けないで、「△△さん」として集まれることかな。



一般社団法人 NIMO ALCAMO



古市さん

所在地：大阪市東住吉区
飲食店のスペースを活用して、生きづらさ、働きづらさを抱える人たちへの就労支援をおこなっている。

- 「社会的なルールの中で排除されてしまう要素をどうデメリットにしないか」という考え方
- 参加者自身の「これがやりたい」という主体性、自発性、能動性を最も大事に
- 必要な配慮はするが特別扱いはしない
- 小さく始めて、ストレスのあまりかからない範囲の中で試せる、模索できるしかけ
- 「福祉的に扱われないこと」で参加者の自己肯定感につながる
- 参加していることを誇れるようなプログラム作りや広報の仕方

京都市南青少年活動センター



横江さん、鎮西さん

所在地：京都市南区
中学生から30代くらいの若者のための居場所づくりやユースワークを展開

- 職員とボランティアや、ボランティア同士の対等な関係性を常に意識
- ボランティア同士で対話ができるような関係づくりを促す
- 参加者の学びや成長が意識されている
- 一定のルールはあるものの、話し合いが必要なあいまいな部分をあえて残す
- 本人の希望を踏まえて、まず参加できそうなものを提案し、プログラム開発や改良をおこなう
- 職員はチームで情報共有をしながら一人ひとりの関わりポイントを見つけている

はっぴーの家 ろっけん



前田さん

所在地：神戸市長田区
サービス付き高齢者向け住宅の仕組みを活用して運営。1階のリビングは地域の多様な人々の居場所になっている。

- あえてルールを作らず、マニュアル化・システム化しないことでどんな人も関われる余地がつけられている
- お互いが無理せず出入り自由な場づくり
- 「トラブルはお題だ！」とその場にいる人たち同士のせめぎ合いの中で分かり合い、結果トラブルは解決しなくても「まあええか」とお互い納得できるようにみんなで考えていく
- みんな同じことをやるのではなく、自分がやりたいことを自分のタイミングでおこなえる